

# 「私たちのちかい」示される

昨年十一月二十二、二十三日に本山恒例の「秋の法要」(全国門徒総追悼法要)が阿弥陀堂で営まれました。二十三日午前一時三十分からの法要に引き続き行われた「念仏者の生き方」の主旨は、若者をはじめとした方々を対象に「念仏者の生き方」のお心を体したご教示「私たちのちかい」を述べられました。ここに親教全文を掲載します。

本日は、ようこそ全国門徒総追悼法要・秋の法要へお参りくださいました。この法要は、この一年間に往生された全国のご門徒の方を追悼する法要であります。お亡くなりになられた方をお慰びして、浄土真宗のみ教えを聞かせていただく縁といたしましょう。

今日の社会状況をうかがいますと、過疎化や少子高齢化、また価値観の多様化などがより一層進んだ結果、従来のように、お寺と地域社会やご門徒の方々が身近な関係にあった時代とは大きく変化しました。ご門徒のご家庭においては、例えば今までのように、み教えが祖父母から子や孫へというように代々受け継がれていくことも難しくなり、その結果、お寺との関係も徐々に希薄になってきているように思います。

しかし、一方でこのような社会であるからこそ、従来のような伝統的なお寺との関わり方ではなく、一人

の人間として仏教や浄土真宗のみ教えに、生きる依りどころを求めたい方も少なくないのではないのでしょうか。私たちには、そのような方々の思いに答え、さらには後に続く世代の方々のために、先人の方々から受け継いだお念仏のみ教えを正しく、また、わかりやすく伝えていく責務があります。

ところで、私は伝灯奉告法要の初日に「念仏者の生き方」と題して、大智大悲からなる阿弥陀如来のお心をいただいた私たちが、この現実社会でどのように生きていくのかということについて、詳しく述べさせていただきます。私たちは、縁起や諸行無常というお釈迦様がさくられたこの世界のありのままの真実に気づくことができません、常に自己中心の心で物事を捉え、その結果として悩み悲しんだり、また、他人と争ったりしています。阿弥陀如来はこのような煩惱具足の私を悲しまれ、そ

のままに救い取ろうと願われてはたらくつづけてくださっています。

この私のために願われた阿弥陀如来のお慈悲のお心をいただいたならば、凡夫だから「何もできない」、「何もしない」、あるいは「何をしてもよい」というような姿勢とはおおよそかけ離れた、すなわち、少しでもそのお心になうような身を慎み、言葉を慎んで、他人の苦しみや喜びを、自らの苦しみや喜びとするような人間につくり変えられていくのです。そして、このことが、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現のための大きな一歩となるのです。

先人の方々が大切に受け継いでこられた浄土真宗のみ教えを、これからも広く伝えていくことが後に続く私たちの使命であることを心に刻み、お念仏申す道を歩んでまいりましょう。

本日はようこそご参拝くださいました。

二〇一八(平成三十)年  
十一月二十三日  
浄土真宗本願寺派門主  
大谷 光 淳

## 私たちのちかい

- 一、自分の殻に閉じこもることなく、穏やかな顔と優しい言葉を大切にします。微笑み語りかける仏さまのように
- 一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず、しなやかな心と振る舞いを心がけます。心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけを大事にすることなく、人と喜びや悲しみを分かち合います。慈悲に満ちみちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき、日々丁寧に一杯つとめます。人々の救いに尽くす仏さまのように

# 法語の世界

## 《原文》

堺にて兼縁、前々住上人(蓮如)へ御文を御申し候ふ。その時仰せられ候ふ。年もより候ふに、むつかしきことを申し候ふ。まづわろきことをいふよと仰せられ候ふ。後に仰せられ候ふは、ただ仏法を信ぜば、いかほどなりともあそばしてしかるべきよし仰せられしと云々。

『蓮如上人御一代記聞書』二百二十八

## 《現代語訳》

堺の御坊で、ご子息の蓮悟さまが、蓮如上人に御文章を書いていたきたいとお願ひしました。そのとき上人は、「こんな年を取ったのに、難儀なことを願ひ出る。困ったことをいふものだ」と、ひとたびは仰せになりましたが、その後で、「仏法を信じてくれさえすれば、どれだけ書いてもよい」と仰せになりました。

## 光寿無量

新年あけまして  
おめでとうございます  
本年も  
どうぞよろしく願ひします

二〇一九年正月  
金光寺寺内一同  
金光寺役員一同

## 忘れ物

忘れ物です。お心当たりの方はいらっ  
しゃいませんか?

